

令和7年度 第3回 学校運営協議会

1 期 日：令和8年2月19日（木）17：30～18：30

2 場 所：図書室

3 出席者：委員（校長含む10名）、事務局2名

4 会次第

（1）開会

（2）学校長挨拶

学校概要報告

（3）報告・協議

令和7年度学校評価最終評価及び学校関係者評価について

（4）諸連絡

5 議事録（○委員、●校長・事務局）

①学力の向上について

○言語も文化も年齢も育ちも違う生徒からの高評価から、先生方の手厚さがわかる。高校進学という成果につながっているのではないか。

○授業で使う学習プリントを生徒の実態に合わせて作っているということに感動した。先生方の指導力の向上や教材作成力も上がっているのではないか。

○熊本の夜間中学訪問や全国の研究会で、クラウドを利用するなどして、それぞれが作った学習教材・プリントの共有ができれば業務改善も進められるのではないか。県内でも、彩志学舎中学校だけのものにするのではなく、共有を図ることができないか。市町立の中学校にも必要とする生徒がいる。外国につながるのある生徒の指導などでリーダーシップをとることができるのではないか。

○教材研究が素晴らしい。

○熊本の夜間中学訪問を全職員でできたのはとても良い。共通理解を図ることができる。

○高校を受験する生徒が複数人いることが先生方の指導の良さ。

○学力の成果指標に、生徒が自信を持てるような生徒の指標・伸び率を入れてはどうか。

○生徒に関する指標があればいいと思うが、どのようなものかは悩ましい。生徒それぞれに最終目標が違う。

○自分に合った教材で学習意欲がわいてきたというようなことを救いあげることができようになればいい。

○もっと深く勉強したい、学びたいという気持ちを育てているから、それを図るような。

○生徒側からの、意識調査を一步踏み込んだ内容のアンケートがあってもいいのではないか。

○外国語をどれだけ習得したかを「can」「do」で評価する成果指標 CEFR（セファール）のようなものもある。検討してみてもどうか。

②心の教育について

○非認知能力（はかれない学力）が「心の教育」に該当する部分なのかもしれない。この項目であれば前項目の生徒の指標は必要ないかもしれない。生徒が日本語スピーチコンテストにも挑戦しようとする、先生方が背中を押されることが素晴らしい。

○学力の部分を単純評価するのは学校の成り立ちから考えてもよくない。卒業後も社会とつながりあいながら学び続ける姿勢を育むことが大切だと考える。ここの指標について成果を上げている。

○情報モラルについても心の教育で取り扱ってほしい。

●警察と連携した講演会を開くなど、計画的に取り組んでいる。

○小中学校の「心のアンケート」では「自分は自分がこのままでいいと思う（自己肯定感）」という項目がある。いじめのアンケートとは別に、「安心して生活できているか」などを聞くのも大事なこと。

○自己肯定感や自尊感情は、世界的にみるとここ 30 年ぐらい、日本人の自己肯定感は低い。

●自己肯定感をはかるアンケートは現時点で実施していない。いじめのアンケートや生活アンケートを行っている。

○安全に守られる環境を作ることで教育は始まる。生徒が先生に丁寧に教えてもらっていると答えること自体、話しやすい環境、関係性なのではないか。

○割合で結果を見ているが、個別のことがぼけていないか。将来の夢を持っていることについての肯定的な回答をしていない生徒に対して、どのような対応をとったのかが分かるとよい。

●授業開始前の 17 時から先生方が教室に行き、生徒と話をしている。どう関わるかについてさらに考えていきたい。

○県内同じ項目でアンケートをしている。成果指標については 85%以上というのがあるので A 評価で良いとは思いますが、一般の中学校でもこのような高い数字が出るものなのか。

●入学の時点で本校を「選んで」はってくる生徒達なので、一般の学校とは結果が違ってくるかもしれない。何かしたいと思って様々な思いで入学する生徒たちが多い。逆に何かがないと夜に毎日登校し続けることができない。素地が違うのではないか。それに加え、教職員がしっかり関わっており、仲間や先生が支えていることを実感できるとこの数字になるのではないか。

○この学校は心の教育がとても大事なところ。

③健康・体づくりについて

●生徒たちは「体調が悪ければ休む」という自己調整ができている。

④教職員の働き方改革について

- 土日祝日を除いて5日間の休暇があるのがいい。
- 献身的な先生が多いと思うので、無理をしないようにしてほしい。

⑤特別支援教育について

- 委員の先生に相談し、佐賀大学から講師を招いて研修を行ったのが大変良かった。職員からも次年度は研修を2回に増やせないかという声が上がっている。特別な支援を必要とする生徒が来年度の生徒にもあるだろう。そのような生徒に関わってきた教職員も少ないので、研修をしながら対応していきたい。

⑥日本語指導について

- 県内の日本語学校の講師を招き、学習以外の生活面などについても話をうかがった。佐賀県国際交流協会（スパイラ）のボランティア養成講座にも職員が自主的に参加している。